

突然の訃報は、史上最高の暑さと言われた、うだるような八月の真夏日に届いた。上着ネクタイ着用のこととある庁内の規定を一課全員共犯で黒く塗りつぶし、七月初めから俺たちはボロシャツにコットンパンツという軽装で相変わらず駆けずり回っていた。長引いた成和商事の内定に片が付き、一気に検挙へ持って行つた地検に付き合ひ目を皿にして書類押収を終えて、明日から二日間、待ちに待った休みという日だった。大森署に本部の立つ強盗殺人事件に借りだされている龍介とは最近では本庁で顔を見かけるくらいで、相変わらずの昼飯食つたかメールに「忘れた」の返信と、それに加え「今夜は寄るよ」という短い一言があり、代々木の駅を出た時点で買い物でもしようとする方向転換した時、再び携帯が鳴った。余程のことがない限り電話してこないおふくろからだつた。

親父が亡くなったという母の一言は、予想以上に俺を打ちのめした。一瞬の差で感情を遮断したが、目の前の景色は突然色を失い、俺の立っている地面だけを残して恐ろしいスピードで風化していった。母の声は落ち着いており、明日帰つて来られるのと訊き、龍ちゃんにはあんたから知らせてくれるかしらと付け加えた。喉元からようやく絞り出した自分の声は遠く、俺は、母さん、大丈夫かと言うのが精いっぱいだった。電話の向こうで母の呼吸が一瞬詰まるのが判った。気丈な俺の母親はすぐに、「雪乃の家族と向こうのご親戚がすぐにいらしてくれただから。県警の方たちも。そうだわ、あんた、喪服持つてる？」と言つたが、言葉の最後のほうは震えていた。

「喪服は何とかするから心配しなくていい。準備して、今夜中に帰るから」

「忙しいのに、悪いわね」そんなことを言い、母は壮絶な涙声になつた。

「そんなの・・・当たり前だよ母さん。雪乃に代われるか」

電話を代わつた姉の声は、事態を把握できていないような、茫然自失したものだつた。

「誠吾・・・」

「父さん、いつ」

「今朝・・・県警の人が見つけてくれたの」

「え？」

「昨日の晩からね、ふらつといなくなって・・・」
背筋がすうっと冷えていく。

「春日居町の・・・唐土神社の前で」

二十一年前、龍介の父親が無念の死を遂げた場所だ。

「お父さん、自分の拳銃で・・・」

自殺だった。

二回のコールで繋がった龍介に「親父が亡くなった」と告げると、電話の向こうで一瞬龍介の気配が消えた。しばらく互いに無言のまま、俺は携帯を握りしめた。気持ち悪い汗を背中に感じた。

「用意して、迎えに行く。俺はまだ六階だから、車借りておくよ」

一切の感情を押し殺した、無機質な声が聞こえた。

「喪服持ってる？」そう龍介に訊いた途端、「喪」という字が急に恐ろしい実態を伴って俺の眼前を覆った。

「持っていない。誠吾の分も買っていく。心配しなくていい」

今夜九時と言って、電話は切れた。

遠のいていた喧騒や色彩が一気に戻ってきた。

五感とは別に俺は、見えない鉛が自分を飲み込んでいくような感覚に襲われていた。

去年の暮れに見た父親の顔を思い出していた。

そんなにつらかったのかと、その幻影に語りかけた。

幻の親父の顔は、俺に遺伝した口許に微笑を浮かべて漂っていた。糸の切れた、凧みたいに。

白いワイシャツに生成りのジャケットを着た龍介が玄関に姿を見せた。外回りでわずかに日焼けした精悍な顔には、一切の感情を読み取ることが出来なかつた。「喪服なんか着ていく気になれない」と言いながら龍介は高島屋の大きな紙袋二つを上がり框へ置き、両足からもぎ取るように革靴を脱ぐと、そのまま台所へ直行して水を一杯飲んだ。反った首筋が換気扇の白熱球に照らされ、喉仏が何度か上下した。そんな龍介の一つひとつの動きを追っていると、俺は自分自身が次第に冷静になっていくのが判った。真夏の夜の熱気とは正反対に冷え切っていた指先に、かすかながら血流が再開されるのと同時に、それまで俺は両手を固く握りしめていたのだと知った。

龍介は俺を振り返り、大丈夫かと訊いた。

月夜に切り立つ氷山を映すような瞳には、底知れない絶望が宿っていた。

眼前の龍介が突然歪み、瞬きをすればするほど見えなくなつた。自分が泣いているとは思わなかつたが、それが判つたのは龍介が俺を抱きしめたからだだつた。長い指が、俺の髪の毛を優しく梳いた。かすかにアフターシェーブローションの香りがした。少し顔を離して、親指で俺の涙をそっと拭つた。

「行こう。おとうさんが、待ってる」

こめかみを撃ち抜いた父は、検視のあと頭を包帯で巻かれ、かすかな微笑みさえ浮かべたまま狭い棺桶に収まつていた。この時期の遺体は傷みやすいからとそこら中にドライアイス詰められて、放心している家族の代わりに忙しく立ち動く山梨県警の同僚たち皆の迷惑を裏切るかのごとく、眠っているような、幸せそうな顔すらしていた。

俺たちを見た母はついに泣き崩れ、俺は母の細い背中に手を添えた。茫然として涙が出ないよりも、感情の爆発を我慢しないことに少し安心した。小さい俺の手を引いて公園へ連れて行ってくれた母が、今はずっと小さく感じた。最愛の夫

をこんな形で失った女の通った鼻筋が涙に濡れるのを見て、やりきれない無念さを感じた。姉は遅くに授かった二人の幼い息子たちを抱きしめたまま、縁側に座って放心していた。俺を認めると、母親にそっくりな優しい目を充血させたまま無理して笑顔を作ろうとしたが、その努力は無駄に終わり、父と瓜二つの俺を見て泣き伏した。

龍介は、一切のしがらみから解放された父の顔に、少し首をかしげながら見入っていた。やがて右手をそっと伸ばし、冷たくなった頬に指先で触れた。途端、整った横顔はかすかに歪み、龍介は首をうなだれて目を閉じた。大粒の涙が頬を次々と濡らしていき、「どうして」と、抑えた声で何度も亡骸に問いかけていた。

読経の間中、俺は喪主として祭壇の横に座りながら、頭ではまるで別のことを考え続けた。幼い頃の記憶がよみがえるにつれ、今日の前で葬式を挙げられている男は父ではないような気すらしてくるのだったが、遺影の中で県警本部参事官の制服に身を包みはにかんだ笑顔をこちらへ向けているのは確かに俺の父で、目に焼き付いて離れない包帯の白さは、それらのかけがえのない記憶をもすべて消し去ってしまうかのように、脳裡いっぱい広がっては消え、やがて断片が点滅を繰り返しながら、永久に暗闇へと吸い込まれていった。

翌々日が友引だったため、父の亡骸は通夜の翌日、仏滅に荼毘に付された。火葬場での最期、志を共に戦ってきた同僚の死を悼み、百人を超える男達のそこかしこから堪え切れないすすり泣きが漏れ聞こえた。遺骨を胸に抱えて自宅へ戻り、会葬御礼の挨拶を終えるころによく俺は、親父は逝ってしまったのだと実感した。不思議と涙は出てこなかった。

翌日俺と龍介は県警へ父の私物を引き取りに向かい、世話になった同僚たちへもう一度挨拶した。遺書も残さず逝った参事官の机は整然と片付いていて、本部長に断って開けた引き出しには、書類一つ残っていない。訊くと親父はここ数か月黙々と書類の整理をしており、何しすると問う同僚たちに、人生何があるかわからんからなどと笑っていたと教えてくれた。県警の男たちは俺や龍介の肩を叩きながら、お前は朝倉さんにそっくりになった、龍介は二階堂さんの生き写しだ、ふたりとも立派に成長したなどと言い、今期で父と共に退職するはずだった本部長は俺の手を握ると、賢吾を部下に持って幸せだったと言った。おれはその手に父の警察手帳と警棒を返し、深く一礼した。鼻の奥がつんとして目頭が熱くなったのを隠し、俺は龍介と一緒に県警を後にした。

自宅近くまで来ると、龍介は自分の家の様子を見てくると言い、途中の路地をすりりと入って行った。俺はそのまま家へ上がり休みの連絡をするべく携帯を取り出すと、母が横から俺の腕に手をそつと添え「大丈夫だから」と言った。

「無理するなよ」と俺が言うと母は「事件は待つてくれないでしょ」と、少し笑った。

「わたしは、これでも刑事の妻よ」

そう言うとうちは片付けをしに姉のところへ戻って行き、その途中振り返って「冷奴と茗荷を用意しておくから。龍ちゃんも好きだったわよね」と言った。

「うん、ありがとう」と俺は応えた。

ふと、かつての自分の部屋を見たくなかった。

二階の勉強部屋は、今は甥っ子たちが来る時の寝室になっていた。引き戸を開けるとわずかに子供の匂いがした。甘ったるいような芳香が鼻腔をくすぐった。

本棚に残っていた山のような参考書も、文庫本も、中学時代に凝って作った拳銃のプラモデルもそのままだった。埃ひとつ被っていないのは、母が丁寧に掃除をしてくれている証拠だった。何度となく一夜漬けた天然木の勉強机は年月を経て重厚な色合いを深めており、そつと手を振れると、学生時代の溢れんばかりの思い出が、脳裡を横切っては消えていった。その時俺が引き出しを開けたのはまったくの偶然だったが、達筆な父の字で「誠吾へ」とある白い封筒を見た瞬間、すべての思考が停止した。

しばらくその場で固まったまま、俺はその封筒を凝視していた。親父の遺書だと確信した。一刻も早く開封したいと焦る気持ちと、それを東京へ持ち帰って、代々木の家でひとりで読まなければならないという予感とが、目まぐるしく交錯した。

俺は封筒に手を伸ばした。半分に折りたたんで、無造作にスラックスのポケットへ突っ込んだ。

倉沢に借りたプジョーのハンドルを握る龍介の横顔が、規則的な感覚を置いてウインドウを横切っていく水銀灯に照らされていき、俺は脱力したままそれを茫洋と見つめていた。結局もう一日休みを取った俺たちは、夜中になつてから甲府を出た。その時間の中央自動車道はさすがに空いており、東京までの約百二十キロはあつという間だった。左手でハンドルを支え、龍介は時々俺の方を見た。目が合うとかすかに微笑んで、そのまま手を伸ばし、甲で俺の頬を撫でた。俺は茫然としたままその手を緩く掴んで、そこへ唇をつけた。龍介は俺に右手を預けたまま運転し、途中でギアをチェンジする時には、俺が空いた手で操作した。代々木へ着くころには眠くなるかと期待したが、結局俺たちは目がさえ渡つたままで、車をガレージへ入れて部屋へ上がり、それぞれウイスキーを片手に台所のカウンターへ腰を下ろしたまま、無言で長い夜をやり過ごした。

俺はスラックスのポケットから封筒を取り出し、親父が描いた「誠吾へ」という文字をもう一度眺め、グラスを置いて封を切った。

龍介は何も言わず、俺が封筒から便箋を取り出すのを見ると、ウイスキーを持ってソファの方へ歩いていった。俺の目は自動的に数行を読み進めていった。几帳面に並ぶ親父の字を見ながら、改めて逝ってしまったのだと思つた。

「私は父親として、警察官として、お前に詫びなければならぬ。このような形で自分と訣別することは、残された家族へ多大な迷惑と心労を掛ける他、自分自身の精神の脆さをここへ露呈する結果となることも、重々承知の上だ。頭の良いお前はきつと、既に私が自害を選んだ理由を判っているのだろう。二十一年の重責に耐えられず、かけがえのない同僚を死なせてしまった事実を、自分の死を以て償うというだけなら、それはどんなに楽だろうとさえ思う。同時にそれは、どんなに美談で、虚実で、そして自分自身と、修哉に対する裏切りになるのだろうか。

誠吾。私がかつて、龍介の父二階堂修哉を心から愛していた。息子であるお前を想うのと、家族を愛する気持ちとはまた別に、それは突如として心の奥底へ沸き起こった、否定の出来ない感情だった。妻を失った修哉は、お前が高校で龍介

に出逢つたのと同じ時期に、県警へ配属になった。一目見た時から、私の心のいちばん深い部分に得体の知れない感情が深く根を下ろし、妻子を持つ身でありながら、同性の同僚にどんだん心を奪われていく自分を呪つたものだった。

お前も知つての通り、龍介へ受け継いだ修哉の美貌は、見る者をまるで幻惑にかけけるほどだった。県警初日に私に向かつて微笑んだ修哉は、のちに彼自身も、理由が判らずも私に強く惹かれていったと語つてくれた。私たち二人は、考えること、思うことのすべてが、互いのそれと寸分たがわず呼応することを知つたのだ。何度となく気持ちを抑制し、このままでは互いの人生を狂わせてしまう、その前に何とかして別離する方法をと、必死で探つたものだった。今となつてはたつた二年半の間だったが、理性と狂気の狭間で、私と修哉は互いを食欲に求め、その結果、私は修哉を失うに至つた。出逢うべくして出逢い、喪うべくして喪つたのだ。まるで、それはいにしえからの約束事であるかのごとく、現世でこうして悶え苦しむことが、己に架された宿命であるかのごとく。

私がこれをここに告白するのは、お前たちにはだけは、決して私たちと同じ運命を辿つて欲しくないからだ。もしこれを運命と呼ぶなら、それを自分たちの手で変えていつて欲しいと、切望するからだ。

修哉を失つた時から、私の時間は止まったままだ。家族であるお前たちを愛し続ける自分は、いつの日かまた、時空を超えて修哉と巡り逢い、今度こそ彼を愛しぬくことを、分裂した心で渴望しているのだ。

龍介を想うお前の気持ちだが、私には痛いほど解る。

誠吾、

どうか、背を向けず、心を殺さず、気高い精神で私の罪を払拭して欲しい。

どうか、愛することを畏れないで欲しい。

どうか、失わないで欲しい。

二〇二二年八月十七日

「朝倉賢吾」

死の三日前にしたためられた短い遺書を前に、俺は心に強い衝撃を受けていた。慎重に言葉を選んで書かれた文面が次第に涙で歪んでいった。偶然出会った男に惚れたどこかの情けないオヤジが酔狂で書いた一文と嘲笑うのは簡単だった。ただ、そうして唾棄するには、それはあまりにも純粹でやるせなく、苦しく、狂おしいほどに切実で、正直なひとりの男の告白だった。

龍介と出逢った時から心に抱いていた漠然とした不安が今、恐ろしい現実となつてのしかかつてきた。これは運命なのだと思つた。夢に垣間見るあの暗黒が地平線を覆つていく光景は、前世のどこかで、すでに俺自身が見ていたものなのだと確信した。自分たちの父親はそれを辿ることを余儀なくされ、そうして命を落としていったのだ。決して幸せに結ばれることのないまま、永遠に時空を彷徨い続けるのだ。失いたくないという悲鳴は虚しく響き続けるだけで、どんなに足掻いても、それを避けて通ることなど出来るわけがないのだ。

そう思つた瞬間激しい鳴咽が込み上げてきて、俺はコントロールを失つた。もう止まらなかつた。口に両手を当ててそれを防ごうとしたが無駄だった。龍介が駆け寄ってきた。俺を背中から力いっぱい抱きしめ、判つてたんだ、もう、ずっと前からと言つた。龍介も泣いていた。そして、どうか俺の父を赦して欲しい、出逢つたことを、後悔しないでくれと叫んだ。狂いそうだった。涙が止まらず、俺は自分の心が爆発しそうになるのを感じて身を振り、呼吸を貪つた。龍介の顔が苦痛に歪んでいた。何もかも知っているのだ。お前のせいじゃない、お前の父親のせいじゃないと俺は叫んだ。頭の芯が燃え滾っていた。野良犬のように死んでいった二人の男たちのことが、無念で、切なくて、どうしようもなかつた。夢中で龍介を抱きしめた。息が詰まりそうだった。龍介の鼓動を直に俺の胸で感じた。龍介が俺の首筋に顔を埋めた。涙でシャツの襟が濡れていった。龍介の背中が熱かった。そうして俺たちは互いの呼吸が収まるまでの数分間、そのままだった。親父に会いたい、と思つた。会つて、もう一度、話がしたい。

自分を責めるなと伝えたい。

だがその身体はもう茶毘に付され、灰となつて、土へ還つて行つたのだ。

俺たちは無言のまま、上半身裸で布団の上に身を投げ出していた。八階の窓から入る僅かな風が、熱を持った額に心地よかった。横で龍介が半身を起こし、じつと自分の指先を見つめた。その横顔へ「何考えてる」と問うと「則子さんのこと」と言った。そうだ。あの聡明な母が、父が最期までひた隠しにした想いに気付かなかったはずはない。いったいどんな複雑な思いで夫の横顔を眺めていたのだろうか。それを失った今、息子もまた二階堂の血に心奪われていることを、彼女は知っているのだろうか。雪乃にしてもそうだ。何かと俺に気を遣い「ひとりで悩んでいないで、この姉を頼ってもいいのよ」と笑った。今まで深く考えたことはなかったが、もしかすると姉は、何かに気付いていたのかもしれない。俺を見る龍介の瞳は暗く翳っていた。

「そんな顔をするなよ」

龍介のせいじゃない。

「失うのなら、最初から逢わなければよかったんだ」

双眸にせつない光が点る。

「愛してしまっただけでは、もう遅い」

俺は龍介を抱き寄せた。

「今日はもう考えるのはよそう」

俺たちは抱き合ったまま崩れるようにして寝入った。むせ返るような暑さだったが、そんなことは気にもならなかったし、いずれこの時の会話を俺は脳裡にまざまざと再現することになるなど、その時は思ってもみなかった。

おぞましい運命の一步を、そうして俺たちは、知らないうちに踏み出して行った。